日本のプロコーチ宣言第1号　榎本日出夫（日立戸塚コーチ）

私のバスケット狂書 ②

その（6）

予選リーグの二試合は、考えていたよりも簡単に勝って、いよいよ強豪の日通戦をむかえました。日通は、日本リーグ第七位のチームで、実力も入替戦に出て来たチームの中で、最強であり安定したチーム力を持っており、うまく作戦が通じるかどうか心配でした。

しかし、このゲームに勝たなければ、一年間辛い練習や、特に精神的にいじめた、午前四時までの練習等のことを考えると、選手達に申し訳がたたないと思い、前夜は床についてからも、ゲームの進行状態や、作戦が頭に浮かんで結局、一睡もしないで朝をむかえました。しかし、不思議と眠気もなく、頭は変に冴えて気味悪い位でした。そして朝食時の、選手達のなんときわやかなことか!!

そして朝のミーティング。今までこんなに神経を使って、しかも言葉を選んで過去に、ミーティングをやったことのない私は、筋をノートに書き選んで、重要な言葉を、丸かこみしてミーティングに臨みました。

その大要は、「勝つ」というテーマで、精神的にいじめた練習の成果を出して、負けるとしたら、自分自身にのみだけだ、というような言葉を引用して、選手達に精神的な暗示をかけました。決して勝つという言葉は使わず、負けない、絶対負けない、それだけの努力はしきっているのだから、というように、精神的な物を中心にして話をしました。

反面、私自身はというと、そういったものの、日通というと全日本の選手や、その他の選手も、ひとクセ、ふたクセもある選手ばかりだと思うと、ミーティングで言ったこととはうらはらに、精神的にはかなり、不安定だったというのが本音で、作戦通り練習通りに試合をやってその隠密作戦が裏に出た時の、手の打ち方や選手のせり合った時の、弱さなどのことを考えると、パスを連転していく途中でも、他の交通機関なら自に入らなくなって、ぶつかりかけたりしている自分をみつけて、ちょうどその時、ボクシングのファイティング原田氏の記事が、載っていた週刊紙があったので、それをもとに話を展開していきました。彼は敵選手との戦い、そして戦法として肉を切らせて骨を切る。（これはファウルの、部分に引用しました。）これだけの苦しい試合前の、戦いに勝ったのだから、絶対に相手には負ける要素は何もない。

精神的に固くなるような言葉は極力さけて、今までやってきた努力の数々、苦しい自分との戦いの話などを中心に、選手に語って聞かせ、これだけやってきたんだから、負ける要素は何もない、ということでした。

一度、ひきしめて、あわてて、カセットステレオの音を、大きくして選手に、気付かれないようにするのにも苦労しました。

無事に、名古屋の市体育館に着いて、ゲームアップまでの間、自分を落着かせ、気力と自信を盛り上げるために、一人になって色々やってきたことを、思い浮かべることにしました。

とにかく、やり残したことは何もないと、自分に言い聞かせ、作戦の組み立てをもう一度やり直し、これで大丈夫だ、そういえば日通さんには塩を、貸してあげたことがあるのを、思い出しました。

その塩というのは、予選リーグの第二戦目、日通さんと相手チームが、同色のユニホームを着用していたことに始まります。

日通さんは宿を遠くにとっていたために、ユニホームを取りに帰れば、寸福とうなされてしまうし、相手チームは自分達は、規定の色を着用しているというし、困っているのを、こちらのベンチ側から見つけました。

私のチームは、いつも濃淡二着は、万一のことを考え、持ってくるように習慣づけてあるので、すぐに日通さんのベンチに行き、「変な話だけれど、戸塚のユニホームでやったらどうですか。」という話を持っていきました。三分前の笛もすでに鳴っているので、協会の人も、とにかく色別ができれば、試合になるということで、さっそく両方のチームで、着替えをしました。

この塩、いやユニホームを貸したことを、思い出すにあたってすでに、ゲーム前に勝っているんだという気がした。なぜならば、コーチ、選手の心の持ち方が違っていたからです。これで自分自身の心の、もやもやも晴れて、勝算十分だとはりきって、コートに降りていきました。

しかし、そこに思いもかけぬ落度が、試合前に出てきました。

〈続く〉

自分自身と選手にも"暗示"

念には念を入れて作戦を練る

2試合勝って日通戦へ

榎本日出夫
武蔵中学（東京）、武蔵高校（同）、武蔵大学（同）をそれぞれ卒業。
現在、女子実業団チームの日立戸塚コーチ。昭和十六年七月七日生まれ
〈現住所〉横浜市戸塚区舞岡町一二二一四一六
電話〇四五（八二二）二七〇九番。

思いもかけない落度が表面化

—前回までのあらすじ—

十年前のある夜のこと、杉野短大のコーチ依頼の電話を受けて引き受けたが、いま思えばこの電話が私の人生を変えた。その後、先輩や恩師のすすめもあり、日立戸塚のコーチをやることになり、この時、どうせやるならと「プロコーチ」の看板をかけ、バスケットでメシを食う決心を固めた。

日立戸塚をみるようになり、練習試合に遠い所へ行くため、往復に時間がかかり、選手にも大きな負担のためあれこれ考えていたところマイクロバスが中古車屋にあるのが目に入ってきた。苦労に苦労を重ね、四六時中入手方法を考えて、ようやくマイクロバスを手に入れた時は嬉しくて思わず涙を出してしまったものだった。このマイクロバスをフルに活用して合宿や遠征を重ねたが、そのうち二月の入替戦が近づいてきた。

入替戦にのぞむにあたり、まず戦う相手を知ることだと考え、対戦しそうなチームの指導者の学歴や戦技展、指導の仕方などを綿密に調べ、分析することにかなりの時間を費やしたものだった。一方で選手の体調を六日間の入替戦、ベストにもっていくため、あれこれ計画したり、選手に暗示をかけて、いよいよ入替戦の『戦場』名古屋へのりこんだ。

BASKET BALL IS MY LIFE